

## 肥後金工 八代の金工師-釘谷洞石と聴石

### 肥後金工の伝統

金属を材料とした工芸品を金工といいます。熊本では、江戸時代に刀剣の外装に用いる金具(鐺や縁頭など)を作る金工が発達し、すぐれた金工師が多く生まれました。

明治時代、八代に住んでいた釘谷洞石は、そうした伝統を受け継ぐ金工師のひとりです。

釘谷洞石(本名信次)は、幕末の天保14年(1843)熊本北新坪井に生まれました。熊本城下の坪井一帯には、当時金工師などの職人が多く住んでおり、そうした環境のなかで信次も少年の頃から金工を学び、はやくも17歳で独立したといわれています。

信次は刀装具を中心に作り、作品には「東肥親信」という銘を入れています。この頃の作品はほとんど残っていませんが、肥後金工のすぐれた作品を集めた『肥後金工大鑑』(1964年、日本美術刀剣保存協会発行)に「東肥親信」銘の鐺が掲載されており、確かな腕を持った金工師であったことがわかります。

参照 桐唐草文象嵌鐺 銘「東肥親信」

『肥後金工大鑑』(1964年、日本美術刀剣保存協会発行)所載



釘谷信次 = 洞石(左・当時52歳)と栄太郎 = 聴石(右・29歳)

明治27年(1894)コロンブス博覧会への出品を記念して撮影されたもの。

## 熊本から八代へ——<sup>とうそうく</sup>刀装具からの<sup>てんかん</sup>転換

明治8年(1875)、33歳のとき信次は家族を<sup>ともな</sup>い八代に<sup>いじゅう</sup>移住してきました。その後、明治40年(1907)65歳で<sup>な</sup>亡くなるまで、八代に住んで制作活動を続けました。(最初は旧中島町木ノ場 = 現本町2丁目、のちに旧<sup>にのまち</sup>二之町 = 現本町1丁目へ転居)

明治初年に<sup>はいとうれい</sup>廃刀令が出され、<sup>じゅうよう</sup>刀装具の需要が少なくなったので、金工師たちの生活は楽なものではありませんでした。信次も、八代へ来てからは<sup>かざ</sup>飾り置物や<sup>そうしんぐ</sup>装身具、<sup>ぶんぼうぐ</sup>文房具といった作品を主に作っていました。明治14年(1881)頃から、作品に<sup>どうせき</sup>「洞石」と<sup>めい</sup>銘を入れるようになりました。

現在、<sup>かびん</sup>小花瓶や<sup>やたて</sup>矢立(<sup>けいたい</sup>携帯用の<sup>すみ</sup>筆と<sup>すみ</sup>墨入れ)、<sup>ていねい</sup>時計鎖などの作品が残っていますが、いずれも細かい模様が丁寧に作られた美しい作品です。



雲龍文小花瓶 釘谷洞石作 底に銘「肥後八代住 釘谷信次作」



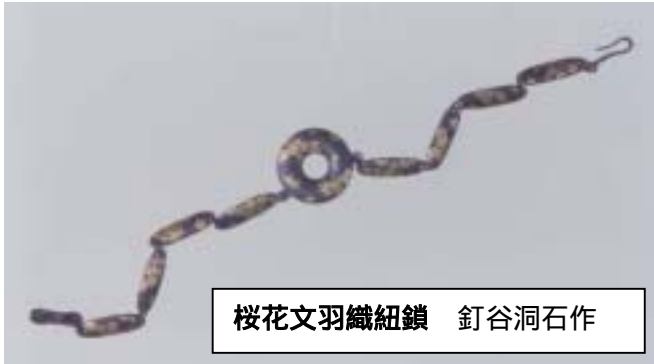
桜に駒文瓢箪形矢立 釘谷洞石作 墨壺蓋裏に銘「釘谷洞石造之」



釘谷洞石が持っていた<sup>したずちよう</sup>下図帖——<sup>とうそうく</sup>鐺などの刀装具の下図が書きためられている。

## 国内外から高い評価

信次は、明治政府が国内の産業を活発にするために開催した内国勸業博覧会に度々出品し、表彰を受けました。明治 26 年(1893)には、アメリカのシカゴで開催されたコロンブス世界博覧会に出品し、銅賞を受賞しています。



桜花文羽織紐鎖 釘谷洞石作



## 親子で金工―息子の聴石

信次の息子栄太郎は、慶応 2 年(1866)に生まれ、父とともに八代へ移住。17 歳頃から金工を学び始め、作品には「聴石」という銘を入れています。栄太郎も数々の勸業博覧会や、明治 33 年(1900)に開催されたパリ万国博覧会などに作品を出品しました。



雲文如意 釘谷聴石作 柄に銘「聴石作」

国内外で高い評価を受けた信次・栄太郎親子は、いっぽうで妙見祭に奉納される笠鉾(本町の本蝶蕪)の金具を修理したり、獅子舞(中島町)の楽隊が使うラッパを作ったりしており、身近な側面も知られます。

作品リスト (これまでに本館で所在を確認したものは下記の作品です。\* 印を展示しています)

|             |              |           |                   |
|-------------|--------------|-----------|-------------------|
| * 雲龍文小花瓶    | 洞石作 個人蔵      | * 菊花文小花瓶  | 洞石作(明治 26 年頃) 個人蔵 |
| * 桜に駒文瓢箪形矢立 | 洞石作 個人蔵      | * 桜花文羽織紐鎖 | 洞石作 個人蔵           |
| * 桜花文時計鎖    | 洞石作 個人蔵      | * 松葉茸文時計鎖 | 洞石作 本館蔵           |
| * 龍文煙管      | 洞石作 個人蔵      | * 竹文煙管    | 洞石作 本館蔵           |
| * 雲文如意      | 聴石作 本館蔵      |           |                   |
| 桜に駒文瓢箪形矢立   | 洞石作 松井文庫所蔵   |           |                   |
| 蔦文瓢箪形矢立     | 洞石作 熊本県立美術館蔵 |           |                   |

## 釘谷洞石と聴石関係年表

| 年 号   | 西暦   | 事 項                                                                                        |
|-------|------|--------------------------------------------------------------------------------------------|
| 天保14年 | 1843 | 釘谷信次、熊本市北新坪井2丁目に生まれる。少年の頃から、熊本の金工師竹川五郎作について、象嵌術を学ぶ。                                        |
| 安政 6年 | 1859 | 17歳のとき、金工師として独立。刀の鐔など主に刀装具を作り、作品には「東肥親信」の銘を入れる。                                            |
| 慶応 2年 | 1866 | 息子の栄太郎生まれる。                                                                                |
| 明治 8年 | 1875 | 33歳のとき、家族を伴い八代木ノ場(旧中島町内＝現在の本町2丁目)に移り住む。                                                    |
| 明治13年 | 1880 | 本町の笠鉾(本蝶蕪)の金具を修理する。                                                                        |
| 明治14年 | 1881 | 第2回内国勸業博覧会に鉄時計鎖、銅小花瓶を出品し、賞状を受ける。この頃から、銘を「洞石」と改め、花瓶や鎖など美術工芸品の製作を中心とする。栄太郎(当時17歳)に象嵌法を教え始める。 |
| 明治23年 | 1890 | 第3回内国勸業博覧会に鉄象嵌五岳文如意、素銅獅子紐龍彫香炉を出品し、賞状を受ける。                                                  |
| 明治26年 | 1893 | アメリカ・シカゴで開催されたコロンブス世界博覧会に小花瓶1対を出品し(このうち1点が現存)、銅メダルを受賞する。栄太郎(当時28歳)も金銀象嵌鉄製時計鎖を出品。           |
| 明治28年 | 1895 | 栄太郎、第4回内国勸業博覧会に出品。作品には「聴石」の銘を入れる。                                                          |
| 明治33年 | 1900 | 栄太郎、パリ万国博覧会に出品し、銅賞を受ける。                                                                    |
| 明治36年 | 1903 | 洞石、第5回内国勸業博覧会に鉄製如意を出品し、賞状を受ける。この頃、住所は八代町398番地。栄太郎も鉄地象嵌時計鎖各種を出品し、3等賞を受ける。                   |
| 明治37年 | 1904 | 栄太郎、本町の笠鉾(本蝶蕪)の金具を修理する。                                                                    |
| 明治40年 | 1907 | 洞石、自宅にて没する。墓は出町の光徳寺。                                                                       |
| 大正 2年 | 1913 | 栄太郎、熊本県生産品評会に出品し、2等賞を受ける。                                                                  |
| 大正 3年 | 1914 | 栄太郎、久留米市水天宮700年記念共進会に出品し、2等賞を受ける。この年、中島町獅子組のラッパを作る(現在も使用)。                                 |
| 大正 4年 | 1915 | 栄太郎、大典記念国産共進会に、如意(漢詩を象嵌)1点、時計2点、時計鎖(花模様と俳句を金象嵌)1点を出品し、2等賞を受ける。                             |
| 大正 7年 | 1918 | 栄太郎、九州・沖縄物産共進会に如意を出品し、2等賞を受ける。                                                             |
| 大正15年 | 1926 | 栄太郎、61歳で没する。                                                                               |